

不妊治療現場の過去・現在・未来

連載 8

片道切符

荒木 晃子

「ひとつだけ、どうしてもあなたに教えてほしいことがある」

前回、少し時間をおいて面会したB子さんは、面接が終わる間際、あらたまった口調で言った。彼女からの質問は初めてだ。

「もし、いま不妊に悩みはじめたら、どこに相談すればいいの？」

最後にそう結んだ問いかけに、私は即答することができなかった。

個の事情と公の利益

「あれから、ずっと考えてたの、昔の自分のことを。ああ、私にもあったんだって。不妊治療だけではない解決法が。って、今頃気づいても遅いけどね」

シンポジウムの後、久しぶりに会うB子さんは、いつもの調子で口火を切った。先日、「家族の創成と再統合シンポジウム」の会場を後に言葉少なに肩を並べて歩いた、あの疲れ切った彼女の面影はない。ひとしきりシンポジウムの感想を述べる中で、「(前略)あの会場の壇上にいた人たちも、ずっと以前から、私たちの選択肢の先について、

私たちを待ってくれていたということ。そして、その頃の私は“そのこと”を知らなかったんだということ」

その後が続くことばのかわりに、大粒の涙から彼女のおもいが伝わる。かつて自分が選ばなかった選択肢があったこと。もし、その道を選んでいれば、そこに自分を待っていた援助者たちがいたのだということ。そして、そのことを自分は知らなかったんだということ。いま、それを知った喜びと、かつて知らなかったことへ悔しさなのか、それとも、もう引き返すことができない悲しみからか、いずれにしろ涙の理由を聞く必要は無いと感じ、私は待った。

一呼吸おいたのち、多少は気持ちが鎮まったのか、冷静さをよそおうかのように整然とした面持ちで再び語りはじめる。

「一般常識としてなら、不妊治療以外の選択肢があることを知ってはいても、自分では子どもが産めない、不妊だから、といった個人的な事情は、養子を迎える理由にはならないと思っていた」

こう語ったB子さんのことばには一理あ

る、そう感じた。もし、「個人的な事情に公共の利益は伴わない」という考え方が私たちの生活に浸透しているならば、B子さんの考え方は間違っていないだろう。「実子ではない子どもの親になる」ことが、「子どもの福祉のためでなければならない」とすれば、「不妊で悩んでいる」という理由だけでは、実子以外の子どもの親になることはかなわない、となる。

つまり、不妊に悩み、児童相談所、もしくは地方自治体(各市町村や保健センター等)に設けられた不妊相談窓口に在籍する相談員に相談する際には、「実子にこだわらず、児の福祉のために、子どもを育てることを検討する」という前提なくしては、不妊問題解決の相談はできないと考えざるを得ないのだ。では、不妊という個人的な事情はあるが、家庭を必要とする子どもを養育したい、場合はどうだろう。「子どもを迎える動機は不妊」だけれども、迎えた子供の幸せを願い、子どもが安心して暮らせる養育者になりたい、という相談は児の福祉の考えにそぐうものではないだろうか。その場合、不妊の悩みは、自己の責任において、それ以前に整理されていなければならない問題として扱われるだろう。やはり、児の福祉を守るシステムに、不妊当事者の悩みに対応する機能はない。

「シンポジウムで、里親養親制度は子どもの為にある、と説明しておられたように、子どもの福祉を前提とした社会制度には当てはまらない、と感じていたのかもしれない。(中略)不妊だから、といった理由で自分を受け入れてくれるところは生殖医療施設だけ、そう思い込んでいたし、当時は実際にそうだった」

当時、不妊のことを誰にも相談できず、不妊に関する情報さえも知りえなかったB子さんが、そう考えるのも無理はない。確かに、自分に起きた問題への対処として、“常識として知っていること”が、実際に“自分の解決策となる”とは、限らない。「制度があることは知っていたけど、それが自分の選択肢の一つだとは思わなかった」とは、まさにこのことをいうのであろう。

不妊は不合理

女性が子どもを持つことを意識した際に、まず「パートナーの子どもを、自分で産みたい」という発想が自然という前提で考えると、「実子以外の子どもを育てる」という発想への転換は、容易ではないはずだ。当然、「自分の子どもを産む願望」から、「実子以外の子どもを育てる親になる」思考への移行は、スキーマの転換と同様に、個人が単独で容易に成し遂げられる変遷ではないだろう。さらに、彼女は「それに、どこにも不妊の悩みを相談するところがなかったの。もちろん、医療施設にもね」とも語っている。つまり、不妊問題に対する援助者を持たなかったのだ。

「もし、いま不妊に悩み始めたら、まず、どこに相談すればいいのかしら？」

最後に、訴えるように向けた彼女からの問いかけは、かつて、彼女が誰にもたずねることができなかった質問でもあったのだ。彼女が生殖医療施設にたどり着いた際も、不妊を治療する対応はできても、“その悩み”は相談できなかったということになる。

医療施設では、受診する患者に対して、必要だと診断された医学的処置を拒むことは、異本的にあり得ない。しかし、その場

合も、挙児希望の患者に対する医学的処理なのであって、決して不妊の悩みを相談できるわけではないことは知っておいたほうがよいだろう。大半の医療者は、不妊治療する患者を診る（看る）のであって悩みを相談する人たちではないからだ。

最近の傾向として、生殖看護の専門性を持つ「生殖看護認定看護師による不妊相談」を実施する施設がある中で、治療内容のみならず、その他不妊にまつわる様々な相談に対応しようとする医療の試みが増えつつある。日々通院する不妊症患者のケアとキユーを担う看護職者たちは、その必要性を以前より周知していたことも理由の一つであろう。同時に、それは当事者のニーズと一致するものでもあった。しかし実際には、不妊治療中の当事者は妊娠を目的に通院することが大半で、自ら妊娠すること以外の不妊問題解決策を医療現場で相談することは稀有であった。社会には、生殖医療現場以外に不妊の悩みを相談する社会機能は稀有であること、そのうえ、医療現場には治療しても妊娠できない当事者が実在するという状況下で、医療者たちは「当事者家族の問題」として、その対応に苦悩してきた実際がある。この現状は、過去に開催された生殖医療者の各種学会でも報告され、大きな課題となっていた。その対極に、子どもの福祉現場では、不妊当事者カップルへの対応に苦慮する援助者たちの問題が発生していたのだ。

もちろん、不妊に悩むすべてのカップルが生殖医療を受診するわけではない。人によっては、その前に、有名な子授け寺へ子授け祈願に出向くカップルや、気分転換に日常を離れて夫婦旅行に出かけるカップル

もあるだろう。なにもせず、ただ自然に運命をゆだねるカップルも存在する。当事者にさまざまな考え方があつた中で、そのカップルなりに何らかの行動を起こすとき、実際に生殖医療施設を選ぶカップルが多いことは既成の事実だ。

特に、「パートナーの子どもを自分で産みたい」という自然の摂理にかなった動機は、不妊に悩む多くの女性たちのベクトルを生殖医療施設へ向ける。そこでは、自然に妊娠できない、という前提での不妊治療がスタートするのであるから、その時点でここに葛藤が生じることは避けられない。このような状況への対応策として、近年、生殖医療施設の中には、生殖医療の専門性を持つ心理士が在籍し、定期的に心理カウンセリングを実施する施設も増えつつある。

前回、B子さんの問いかけに、「不妊に悩み（自分で子どもを産むという前提で）相談に訪れるところ」として、まず、最初に生殖医療施設を思い浮かべ、当事者からの相談を担う生殖医療心理士から、質問への回答書を受け取ったのだった。

はたして、最初に生殖医療施設を訪れた場合、「不妊に悩んでいることを相談」できる環境がどの施設にも用意されているのだろうか。前回、その点を質問項目に入れ送った生殖医療心理士からの回答書には、「(前略) 治療を終結したカップルがその後の人生設計を再構築し、治療以外の選択肢への移行を余儀なくされることを意味するのではないのでしょうか。このことを、これまで生殖医療現場の心理士として、ときに不合理に感じることもありました」とある。不妊現象の解決に、生殖医療は万能ではなく、また、当事者援助を担う医療現場の心

理士も、ときに不合理に感じることもあるというのだ。不合理とは“合理性がない意”であるが、何が合理的ではないのだろうか。後日、質問に回答を寄せた心理士に直接面会し、対談する機会を得た。

心理士はかく語りき

「お送りした書面で、わたしが不合理と申しましたのは、当院のことだけではなく、治療した結果、子どもを授かることができなかったすべての患者さまに対して、わたしが日頃感じていることなのです」

おそらく同世代だろうか、落ち着いた雰囲気気の女性心理士は、簡単な自己紹介の後、さっそく本題に入った。

「世間では、結婚年齢も徐々に上がっているといわれますが、確かに、最近では、初診の際、すでに40歳を超えた女性もおられまして、俗に言う高齢出産の域に入った方は、最初から妊娠率もそう高くはありません。そこから治療を始められるのですから、当然のように結果がついてこない方が多数おられます。ご存じとは思いますが、不妊治療には、妊娠に必要な条件が揃っていれば、たとえ年齢が高くても、絶対妊娠できない、つまり、妊娠率ゼロ%とはいえないのです。対して、いくら年齢が若くても、妊娠率が100%とはいえないのも事実です。この、私たちが高齢と呼んでいる30歳代後半以上の患者さまが、最後の望みをかけて長期間に及ぶ治療をいよいよ終結される場合、その終結する決心をつけることにもかなり苦しい思いをされるケースに頻繁に出会います。実際に、年齢も40歳を超え、40代後半以上の方が多いかもかもしれません・・・その中に、時折、養子をもろうことを考え

てみる、とって医療現場を離れる方がおられるのです。以前、そうやって治療と同時に面接も終了したひとりの女性がおられました。ところが、後日、そうですね、数カ月もたった頃でしょうか、その方から再び面接の予約が入りました。お送りした書面にも書きましたが、治療を終えた方がカウンセリングにだけお見えになるのは、決して珍しいことではないのですよ。気持ちの整理に時間がかかる方や、これからのことを考えたい方など、理由は様々です。また、治療中、カウンセリングを有効に使いながら無事出産を迎えられた方の中には、生まれた赤ちゃんを連れて、あいさつ代わりに面接に来られる方もおられるのです。治療中は気持ちが沈み、問いには涙を流しつつ、辛い思いをされながら頑張った結果、授かったお子さんですから、会って欲しいのかもしれないね。ええ、来室した方は皆さん同じことをおっしゃいますよ。『この児をみて欲しかった』と。私としては、その子の誕生までには、及ばずながら多少は力になれたのかもしれない、そう思うことにしています。しかし、あくまでも、結果は、ご夫婦の努力で出されたのですけれど。医療現場で働く者たちは、ご夫婦が妊娠を目指して頑張っておられるのを支援することしかできませんからね。でも、やはりうれしいですよ、そんな面接は。どなたも、治療中の表情とは全く別人のようで、これまでに見たこともないような喜びにあふれたお顔で、赤ちゃんをしっかりと抱いて来室されます。じつに、カウンセラー冥利に尽きる瞬間ですね」

なんとも、うれしい話を、実にうれしそうに話すものだ。先ほどまでの、心理士と

しての客観的な意見を語る時とは違う、まるで、娘が孫を連れて里帰りする話をはじめ、かしそうに、でも少し自慢げに語る母親のようにもみえる。

「話は戻りますが、その方も、てっきり養子縁組がうまく進んでいるのかと思っておりましたところ、実際にお話をうかがって驚きました」強い口調で話を切り替えた、その表情は陰しかった。

いきどおる

「ご存知ですか？実子以外の子どもを育てるには、厳しい条件や煩雑な手続きをクリアしないとイケないことを」

大まかには理解していた。先日の家族シンポジウムでも、その手続き、特に、夫婦の年齢制限について経験者のパネリストの方が熱心に語っておられた記憶がある。その話を伝える。

「やはりそうでしたか・・・実は、その方も『子どもがほしい一心で、一生懸命不妊治療を頑張ってもできなかったことを、勇気を出して話したのに、門前払いに近い形で、けんもほろろに追い返されてしまった』と、泣きながらおっしゃっていました。『もう二度と行きたくない』とも・・・返す言葉が見つかりませんでしたね、あの時ばかりは』
「いったい、何があったのだろう。養子を迎えることを前提に、その専門家に相談するために訪れた場で、どんなやり取りが交わされたのだろう。怒りと共に疑念がわき起こる。そんな私の心中を察してか、彼女は話の先を急いだ。

「その面接の際も、とても感情的になられまして、激しい口調で、泣きじゃくりながらお話しされていました。確かに、通院中

の面接でも、治療をいつ辞めるか、この先、どうやって生きていけばいいのか、自分はこのまま一生不妊症という病気を背負って生きていかなければならないのか、など、次々に容易に答えを出せない悩みをぶつけてくるタイプの方でした。その方の詳しい状況をお話するわけにはまいりませんが、普段は、知的で教養の高い温和な方なのですよ。でも、不妊治療では、この方のように、たび重なる治療の失敗を繰り返すうち、徐々に自信をなくし、本来の自分を見失っていくかのように変化される方も多いのです。その都度カウンセリングを受け、やっと気を取り直して、次の周期に期待をかけることを何度も繰り返すと、最後には、もう次に期待を持たないほど気分が落ち込んで、軽い鬱状態に入る方も珍しくはありません。治療周期は、女性の月経ごとによってくるわけですから『毎月』が周期、そう考えると、毎月のように気持ちのアップダウンを繰り返すことになりますよね？これが治療中の患者さんの日常です。特に、高齢の女性は、日を追うごとに卵子の状態も、子宮やホルモンの状況も加齢と共に良くない方に変化します。だから、高齢女性の不妊治療は、よく、『時間との戦い』といわれることさえあるのです。その方も、いったんカウンセリングも終結されたわけですが、決して、本来の自分自身を取り戻し、治療終了後の生活やその後のことを冷静に計画的に考察できる状態ではなかったかもしれませんね。治療をやめると決心されてからは、急いで次の準備、この方の場合、養子を迎えることだったのですが、その準備に取り組んでおられたのだと思います。やはり、治療が終わっても、時間との戦いが

続いていたんでしょうか。そう考えると、養子の相談をしたところでも、おそらく冷静に話ができなかったのかもしれませんが。

『相談員に話す前から涙が止まらなかった』と言っておられましたから」

不妊心理の特徴の一つに、「感情のコントロールがむずかしい」とある。おそらくその女性は、自身の感情をコントロールしにくい状態のまま、養子を迎える準備を始めたに違いない。先日のシンポジウムでも話題となったが、彼らを迎える児童福祉現場の専門者たちは、“不妊当事者が面談に来る”ことを知り、その対応に困った経験はあるものの、不妊当事者への対応をどうするか、を特に意識しているわけではない、ということが過去の調査でも明らかになっている。その中で、(社)家庭養護促進協会理事 岩崎氏の報告にもあるように、最近協会を訪れたカップルの約9割に不妊治療の経験がある、という貴重なデータに目を見張る結果となったのだ。この協会では、少なくとも、不妊を経験したカップルという前提で研修制度を設けているという。では、全国に20以上あるといわれる、子どもを斡旋したり、里親・養親縁組を支援する施設や団体、そして、行政の児童福祉現場では、こういった対応がなされてきたのだろう。さらに大きな課題を抱える手ごたえを感じた。「今日お話しさせていただいた大半は、これまでにわたしが出会った、不妊に悩み治療しながらカウンセリングを受けていただいた方々のお話です。実際は、医療現場でカウンセリングを受ける方はそう多くはありません。さらに、不妊治療の施設以外では、不妊の相談ができる場所はほとんどないらしいのです。これも需要と供給の

関係故のことでしょうから、きっと、不妊の悩みを他人に話すこと自体に抵抗をお持ちの方が多いのでしょうね。身近な友人にも内緒で通院しておられる方も多いですから。かといって、ご夫婦以外のご家族がよき相談相手かといえ、決してそうとは限らないのも事実。家族が絡んで、問題がより複雑になるケースも、現にありますからね。わたしは、生殖医療施設にいる心理士だからといって、生殖医療技術にだけ詳しくても、患者さまのお役にたてるとは限らない、ずっと、そう思ってきました。おそらく、そのおもいをお伝えしたくて不合理ということばを使ったのかもしれませんが」

最後に自身で話をまとめ、女性心理士との対談は終了した。

禁じ手

不妊治療を選択すれば医療現場の心理士が、「治療する当事者カップル」の援助者となる。また、養子を迎えることを検討する際には、児童福祉現場の専門者が、「子どもを育てる親になるため」の援助者となる。確かに、それぞれの選択肢の先に援助者がいることには違いない。しかしながら、医療現場には、「養親になるための支援」はなく、児童福祉現場には、「不妊に悩む当事者への対応」はない。当事者たちは、自分で考え、自らいずれかの選択を決断しなければならないのだ。しかも、治療終結までに必要な時間は、妊娠が成立する以外には、自分でその終結時期を決断しなければならず、晩婚化が進む中では、年齢を意識した“時間との戦い”はやむをえないのだろう。医学的には、妊娠率ゼロ%はあり得ないのだから。なにびとたりとも、時間を巻き戻

すことはできない。また、時間の経過と共に歩いた人生の岐路を、引き返すことはできない。そのことを、身をもって経験したB子さんに、意を決してたずねたいことがある。彼女に聴くことしかすべをもたない私が、いま、彼女に“それ”を聴くことを恐れている自分でもあることが分かる。聴き手が話し手に、聴きたいことへの回答を求めるときは、十分な配慮と、五感を使い全身で聴くかのような感性と注意深さが必要だ。今回だけは、満身創痍で臨まなければ、そう思った。

わたしには、聴かなければならない重要な質問がある。B子さんとの面接が始まって以来、ずっと、それを聴くタイミングを見計らってきた。彼女が傷つくことなく、彼女が話せる内容を、話せるだけでいい、いつか聴かせてほしいと願っていたことでもある。本来は、あってはならない、“聴き手にとって重要な質問をする”ということ。しかし、いまは“その時”なのだと確信した。

<筆者のトピックス>

2012年2月17日付神戸新聞朝刊で連載中の特集「その手を握りしめて『第2部 親子になるために』⑥医療と福祉をつなぐ～幸せな縁結び目指して～」に、前号で紹介した立命館シンポジウムが掲載された。

(<http://www.kobe-np.co.jp/rentoku/kurashi/201202sonote/06.shtml>)

これまでも、毎日新聞くらしナビ連載中の「こうのとりの追って」他、各新聞社による不妊、不育症、生殖医療などの特集を頻繁に目にする機会があった。また、里親・養親家庭や、社会的擁護下で暮らす子ども

たちに焦点を当てた記事(特に、東日本大震災以降は急増した)も、以前より筆者の注目するところであった。しかし、いつも、それらは別々に特集が組まれ、「不妊」と「子どもの福祉」が過去に交差する機会は無かった。

今回、先のシンポジウムに参加し、後日筆者も取材を受けた神戸新聞社の女性記者や、メールでコンタクトしてこられた朝日新聞 GLOBE 記者に、筆者は同質のおもいを感じうれしかった。

(<http://globe.asahi.com/feature/201202600010.html>)

「親になりたい不妊当事者と家庭を必要とする子どもたち、相互を結ぶシステムを。そして、いろんな家族がそれぞれの幸せを喜びあえる社会をつくりたい」彼らに出会い、長い間抱き続けたその願いは、決して筆者だけのものではなかったことを知った。

医療者であってもなくても、自分で産んだ子を育てることができた・できなかった人たちにも、その出会いをよろこび、懸命に家族になろうとする者たちのよき支援者であって欲しい。それを願う社会になって欲しい・・・筆者のおもいは尽きない。